

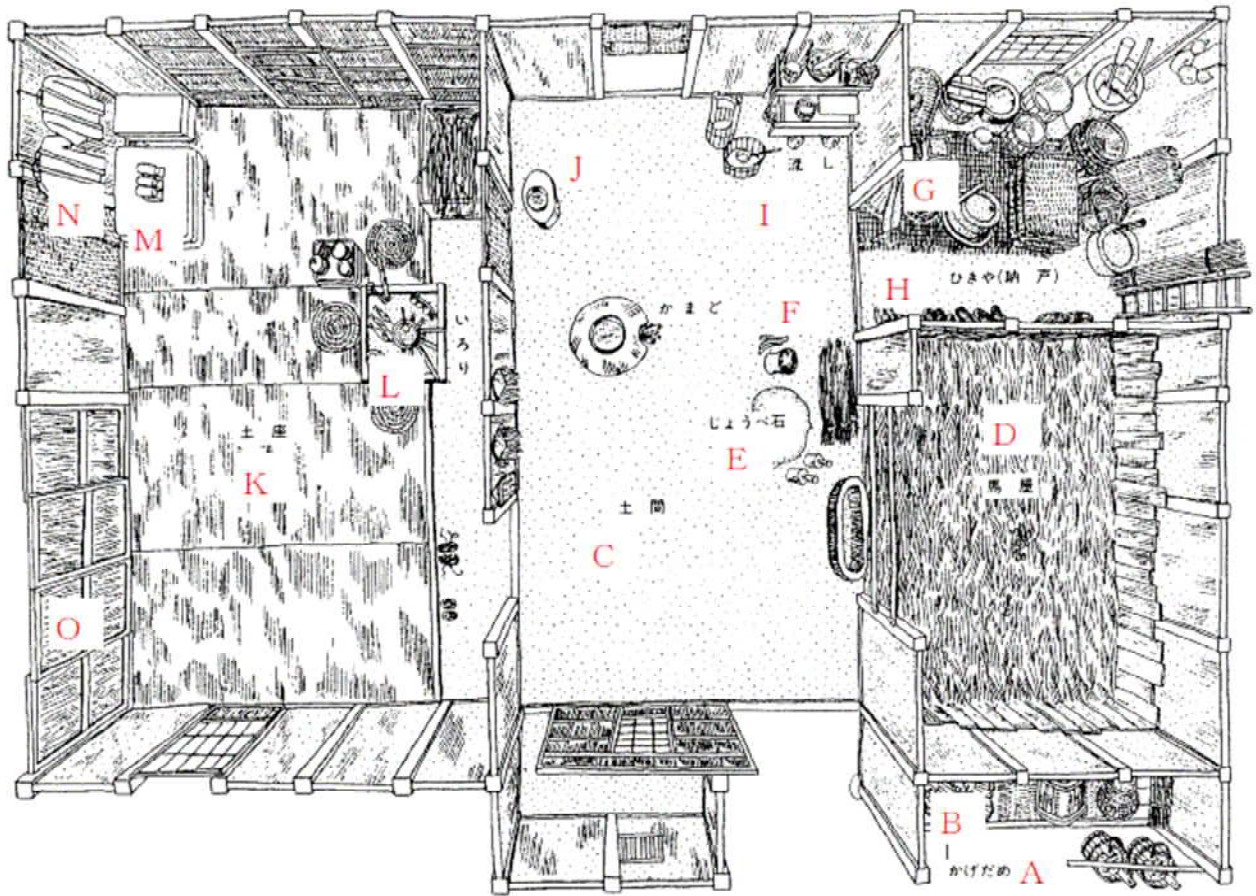
歴史館まなび隊

3

江戸時代前期中農農家

ここでは、今から300年ほど前の江戸時代に建てられた農家を移築し展示しています。ここに移築されるまで上水内郡三水村（現飯綱町）滝沢家で使われていました。

家族は、働き盛りの夫婦と小さい子どもの三人家族です。今は忙しい収穫時の秋の昼下がりで、ついさっきまで、昼の用意をしていた女房が子どもを連れて、農作業に出ている夫を呼びに行っていて、今、この家は留守です。



A : がげだめ 便所。18世紀前半になると、大麦・小麦などの作物の肥料に下肥（人糞尿）を利用するようになりました。各家で使い古した桶を埋めて「溜」

をつくるようになり、北信濃では「がげだめ」、「雪隠」などと呼んでいます。肥桶一つには17kgの下肥が入っています。かついでみましょう。

B：風呂鍬 木の柄に刃をはめた鍬です。

C：土間 粘土をまぜた土でかたくつき固めます。

D：馬屋 馬は家族の一員。農作業で活躍します。

E：じょうべ石 わら打ち石 わらをたたいて繊維をやわらかくし、わら製品を作りやすくします。

F：ひでばち 明かりをとるために、この上で松根を燃やしました。

G：地機 腰を下ろして布を織ります。江戸時代後期から腰をかけて織る高機も信州に広がります。

H：ひきや 物置小屋。農作業道具を入れておいたり、粉ひきの作業をします。

I：流し 食器などの洗いものをします。少ない水できれいに洗います。

J：麻殻 大麻の表皮（繊維になる）をとった後の殻。竈などの焚きつけに使いました。

K：土座 居間。板の床の上に畳が敷かれているのは、座敷だけです。土座では地べたに、わらを編んだ「ねこ」とよばれる分厚いござを敷き生活をしました。

L：囲炉裏 いろりには鍋の内側にとっての付いた内耳鍋があります。中にはひえ、大根、干葉（大根葉を干したもの）を入れ、雑炊風に煮た「かて飯」が煮えています。江戸時代農民の主食です。五徳の上には、やきもちがのっています。

M：すべ布団 麻の生地の中にわらが入っています。信州農村には木綿の綿が十分ありませんでした。

N：麻衣装 大麻の繊維で織った着物です。綿布はまだ普及していません。

O：この戸の奥には、座敷と寝間の二間があります。歴史館の構造上、この二間は復原してありません。

[時代背景]

江戸時代前期の農民は、自給自足を中心とする生活をしていました。農民が買う物資は、塩や農具・工具など自給のできないものに限られ、その支払いも自家製の品物で行いました。しかし江戸時代後期になると都市生活者が増え、商品作物の栽培が盛んになります。農業技術も進歩し、お金を使って物を購入する機会が増えます。

稲作では、新品種を他国から導入しました。また畑作では古くからの大麦・小麦・大豆・小豆や菜大根・かぶ・ごぼうなどの他に、なす・うり・ねぎなどが普及し、次に、じゃがいも・きゅうりの栽培が広がりました。

木綿や菜種、藍などの作物の栽培も広がります。麻から木綿に衣料の素材が変わり、藍により染色をしました。菜種栽培の広がりにより、庶民でも灯火に菜種油を用いるようになりました。また、菜種油は江戸や上州へ大量に移出されました。